

立教大学 社会福祉ニュース

第15号 1991年3月25日発行 編集発行人 佐藤悦子 東京都豊島区西池袋3 立教大学社会福祉研究所

持 続 と 変 容

所長 佐 藤 悦 子

巻頭言を書く季節がまた巡ってきた。当研究所は今年も春・秋の公開セミナーを始め、紀要、ニュースレターの発行など恒例の活動を進めてきたが、その中であって特筆すべき動きがいくつか見られた。

まず、本研究所内にあった「日本IPR研究会」の事務局が、早坂前所長の勤務校である東京国際大学人間関係学研究所に移ったことである。この会の精神と実践は我々の臨床活動をこれからも支え続けるに違いない。

次に、庄司洋子教授を専任所員として迎えたことが挙げられる。5月の研修旅行、秋の公開セミナー、月例の所員会等で仲間として所の活動を共有し、短期間の中に研究所に無くてはならない存在となるにいたっている。

それから、「家族問題研究会」が発足し、何人かの所員が中心になって早速「家庭児童相談室」(各福祉事務所に設置されている)の実態調査が行なわれたことを挙げなければなるまい。日本の現代家族が直面する諸問題に対処しようとする公私の援助機関にとって、家庭児童相談室は地域における前線基地として、想像以上に重要な役割を担っていることが見いだされた。現在調査結果を解説中なので、詳細な報告が待たれるところである。

11月には本研究所の学内移転があった。本研究所の入居していた校宅10号館周辺が、大学の学生関係施設建設用地となったためである。歴史ある研究所だけあって「歴史のあるゴミ」も多く、廃棄か保持か大変悩む一幕もあったが、研究所助手や学生を中心に関係各位の献身的な

協力で無事に移転を終えたことは感謝にたえない。相談室再開を見込んで部屋の一角を区切った。あとは新しい器に芳醇な酒を盛るのみである。

何にもまして、藤本昇所員を病いで喪ったことは我々にとって記憶にも新しい大きな悲しみであった。本号を氏の哀悼特集にすることを御諒承いただきたい。昨年7月の湯河原での公開セミナーで御一緒した時、スタッフミーティングのあといつも闊達に談笑をしていた藤本所員が「疲れたので先に」と座をはずされた。聞けばあのあとすぐに御入院だった由。病室のベッドの上でこれからの著作のことを語られていた先生の姿が忘れられない。彼の魂と残された御家族の平安をせつにお祈りする。

新年度は、今年開始した家族問題に関する調査研究の続行に加えて、臨床研究をも行っていきたいと思う。臨床研究の場合特に理論と実践の一致が事例へのコミットメントとして要求されるので、そのためにも家族相談室の再開が望まれる。学内外のコンセンサスを集めつつ準備を進めていきたい。

持続と変容は反対概念ではない。持続は変容を準備し、変容は持続を内包する。当研究所においてもこれまでの営みをふまえて発展させることが新しい芽を育てることになるのだと思う。学内コミュニティ、地域コミュニティに開かれた研究所の実現にむけて、終ることのない歩みをこれからも続けるだけである。

藤本昇所員を悼む

藤 本 兄 へ

所員 西 澤 稔

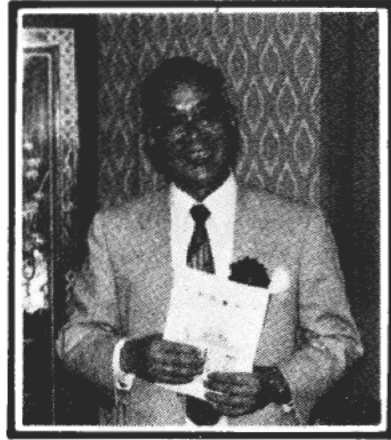
四十年間、いつも数歩も先をリードしながら共に歩んできた兄が、天に昇るまで先に行くとは。〝壮絶、〟という表現では足りない君の姿勢を知っている者として、通夜場で共通の恩師であり君達の媒酌人であった大谷先生夫妻と手を取り合って天に祈るしかありませんでした。あれだけの学生が兄のところにきたことが、全てを物語っていると思います。兄が立教大学で講師をし、所員としての活躍については周知のことなので省略します。

池袋駅西口界隈が闇市で駅から立教が見えていた時代に、小生と二人児童福祉施設事務所の二階六畳間に林檎箱を机として苦学生をしていた頃のことを昨日の如く思い出します。

就寝前になると兄はドイツ語の辞書から目を離さず、いかにも大人びた手つきで酒をたしなみ、時折気持良さそうに煙草を喫っていました。小生はラジオから流れる進駐軍放送でジャズを聴きながら小説を読んでいた差が、今日あるのだと思います。津軽から出てきた田舎者からみると、大学生が制服制帽の時代だったので〝江戸っ子、〟は進んでいるのか〝不良、〟なのか迷ったのも当然。兄は休暇には寄席に行き、当時の桂三木助の大ファンで、口三味線で〝チントンシャン、〟と入れながら話してくれましたね。(それを契機に小生の寄席通いが続くことになりました。) 児童施設で毎年行く海水浴では大変な人気でした。兄はオリンピック選手並に綺麗な泳ぎを小生等に披露してくれました。(高校では水泳部。)

当時まだ〝社会事業〟の時代でしたから、大学出ても嫁さん貰える給料など程遠く、苦学生仲間数人が一人去り、二人去りと教師や公務員となっていました。兄が神奈川県で公務員となり、念願の児童相談所のケースワーカーとなり、場所は違っても、児童福祉という共通の学びでした。兄の著書「児童ケースワーク」(誠信書房1979年)にその姿勢が集約されていることは周知のことです。

兄は小生より2級先輩なのに、卒業は一年後でした。そして公務員になって間もなく、母校に大学院が出来た時、進学しました。学問が本当に好きで専門書を友としていた為に、役人としては昇進できなかったけれど、小生は拍手を



在りし日の藤本昇所員

送っていました。本物のケースワーカーでしたね。そして念願の大学教授となり本望だったと思います。先日この写真を借りるため、横浜の家を訪問しました。奥様は心労のため昨日まで床についていたとのこと、仏壇の遺影をじっと見ている間に、学生帽の頃と少しも変わらない真面目な表情について語りかけました。

奥様が〝研究室の机の中を整理したらこんな物があったんです〟と紙袋一杯のアルバムと一通の白い角封筒を取り出されました。それは27年前に小生も貰った、奥様との結婚案内通知でした。兄は生涯、月給の明細書を見せたことが無かったそうですね。兄が昇天し、学校から送られた最後の明細書を奥様が初めて手にしたといわれます。昭和一桁の中でも数少ない人物でしたね。沢山のアルバムは学生とのキャンプ、コンパ、卒業式、教え子の結婚式等のもので、家には一枚も持ってきたことがなく、それ等の笑顔は家では見られないものだったと奥様がボツリと云っていました。でも小生は知っています。あれ程愛していた煙草を長男が誕生した時にブツリと止めましたね。小生など意地汚なく今でも止められない。結婚案内通知を机の一番下に入れていたことが、兄の全てだと思います。今度横浜へ行く時は三木助のテープと若い頃の共に撮ったアルバムを持って奥様とゆっくり語りたいです。一杯の真心と愛を教えてください。兄に感謝し、40年間の現場にこの3月で区切りをつけ、小生もまた後輩の指導に専念し、兄のやり残した研究を引き継ぐことをこの紙面を通して〝チントンシャン、〟の兄に誓います。

藤本さんのこと

所員 早坂 泰次郎

衝撃だった。

去年の8月、学会運営のことで高田馬場の研究所で1時間ほど話しあったのが最後で、とうとう一度もお見舞にも行けなかった。

誠実そのものの人だった。

どんなことをお願いしても厭な顔はせず、キチンと、それもペン習字のお手本のように整った字の書類が届いた。お礼をいうと「もと事務官ですから」といって笑いとばされた。入院後二度ほどいただいたお便り一通は年賀状だったがーの字にも、いささかの乱れもなかったことが、今となってはくやしい。「藤本さんなら…」という信頼感が、いつの間にか甘えになっていたのではないかという痛みがよぎる。

いつもニコニコしている人だった。

藤本さんが気色ばんだり、言い争いをしたりするところを見たことはなかった。想像することさえ私にはできそうもない。社会生活につきものの葛藤や不合理が語られる時にさえ、藤本さんから笑顔が消えたことはない。そんな藤本さんに接しているといつも、ずっと年上の私の方がよほど子供じみている気にさせられた。

年賀状の御家族一人ひとりの名前に添えて、「ニャンコ」と印刷されていたのもいかにも藤本さんらしく、思わず笑ってしまったが、あの時はもうかなり苦痛の中に居られたのではなかったか、とくやまれる。

社会福祉ひと筋の人だった。

しかもその「福祉」はいつも「人間ひとりひとりと結びついて」いた。制度だけ、政策だけ、管理だけの社会福祉を嫌い、批判しておられた。ギャレットの業績を讃え、その主著を翻訳したいといっておられた。私が若い頃他の人と一緒にやったギャレットの翻訳のことを評価してくれた。この点でだけは藤本さんと対等に話ができた。

まだ還歴前だったのに……。

もっともっと一緒にやりたいことがあったのに……。

どんなに生きたかったろう。

……でも繰りごとはもうやめよう。

藤本先生、本当に有難うございました。

安らかに休息下さい。

そして御遺族に平安を。

藤本先生のこと

—湯河原での三日間—

所員 足立 勲

私がいまは亡き藤本昇先生と最後に御会いしたのは、昨年7月初旬湯河原で開催された当研究所主催の「人とかわる」のセミナーのときであった。今にして思えば、当セミナーの同じスタッフとして三日間ともに過ごしたのが、先生と一緒に仕事をし、語り合った本当に最後になってしまった。私はそのとき、まさかこれが先生との永遠の別離になるとは勿論のこと知るすべもなかった。ただその三日間の間、私は先生の御姿にいつもの先生らしい元気で、張り切った言葉や動きが影をひそめ、どこかもの静かで、何か疲労感が体全体に漂っているのを感じた。そして夏も終り、秋の来る頃、先生が入院されたことを聞き、セミナーでの先生の御姿の印象とともに気になってはいたが、何かと仕事に追われるなか御見舞いにもうかがえず、結局一度もお会いすることなく、今年1月末突然の訃報に接することとなった。

以来今日まで私は病床での生前の先生に御会いできなかったことを悔やみ、残念に思う気持ちで一杯であるが、しかし今こうして筆をとるなか、そうした気持ちとともに、あの湯河原での三日間の先生の思い出がより強く甦ってくるのを感じている。

先生は永年社会福祉の現場で働かれ、そうした実践的身体の全てをあげて、晩年は社会福祉の教育と研究に携わってこられた。私は同じ世界に身を置く同学の後輩として、先生のなかに我国の社会福祉の研究者（行政の現場に永年身を置いてこられたにもかかわらず）にはめずらしい、「方法としての臨床」への感覚の確かさを常に感じ、そうした先生の存在は私自身の仕事にとっても一つの、しかし大きな支えであった。

昨年のセミナーは、おそらくすでに進行していたにちがいない病いのためひどく疲れていらしたが、しかし先生にとって、その臨床的な感覚と姿勢がグループのメンバーひとりひとりに静かに伝わっていった最後の場だったと思う。そのときの先生のグループのメンバーだった私の教え子が、先日私に「藤本先生は、セミナーで静かに、そしてとてもおだやかな目で私たちを見ていて下さいました。ほんとうにやさしい先生でした」と語ってくれた言葉が忘れられない。私は今、先生との最後の時であったあの三日間を、これからこそ大切にしていきたいと思う気持ちで一杯である。 合掌

所員・専任教員となって

所員 庄 司 洋 子

立教大学社会学部の専任教員として、社会福祉研究所の一員に加えていただくようになって、はや1年が経とうとしています。どこの大学においても、研究所という組織には、それぞれに独自の歴史があり、また多かれ少なかれ特別な事情を抱えているもののようです。当研究所もその例外ではなく、これまでの実績が先輩の先生方の並大抵ではないご苦勞によって積み上げられてきたものであることを、この1年間の所員としてのかかわりを通して知ることができました。

どの研究所にあっても、その組織体制や財政条件は、諸活動に制約を与えるものとして悩みのタネになっておりますが、とくに、当研究所の組織は、大学の専任職者が極端に少ないという、かなり変則的な状態にあります。その結果として、研究所の運営や活動のすべてにわたって非常勤の先生方に依存するところが大きく、ご負担をおかけしていることについては、新参者の私が申し上げるのもおかしいのですが、専任の立場として大変心苦しく感じます。

しかし、他方で、こうした非常勤の先生方が研究所に寄せてこられた真摯な眼差しや熱い思いはまさに研究所の財産であり、こうした自発的に注がれるエネルギーなくしては研究所の発展はあり得ません。研究所組織の最大の課題は、諸先生方がこれまで以上に意欲的に研究所にかかわっていただけるような学内体制を、時間をかけながら整えていくことにあると思いますので、所長の佐藤先生とともに及ばずながら力を尽くすつもりです。そのためには、学内的にも決して目立つ存在とはいえない当研究所の存在意義や活動実績を正しく理解してもらい、社会福祉に関心のある学内の研究者の積極的な支持と参加を得ることが必要だと考えますので、そ

のための取り組みについても所員会議で議論が交わされることを望んでおります。

さて、次に研究所の活動内容ですが、現在のセミナー事業や出版・広報の他に、研究所にとって中心となるべき研究活動そのものを、少しずつ実らせていくことができればと願っています。その手始めとして、今年度は佐藤先生とご相談しながら所員・研究員の方々に呼びかけて、全国の家庭児童相談室の実態を明らかにすることを目的とする研究会を発足させることができました。わが国の福祉行政において「家族（家庭）」を看板に掲げた唯一の機関でありながら、その実態が必ずしも知られていない家庭児童相談室に着目したこの研究プロジェクトは、これにかかわったメンバーにとってばかりでなく、研究所にとっても意義深いものとなるのではないのでしょうか。今後も、所員・研究員が共同で取り組むことのできるテーマを選び、共同研究をすすめることによって研究所が活気づくならば、こんな楽しいことはありません。

私自身は、これまで主として社会福祉の対象論といわれる領域のなかでの家族の問題を勉強してまいりました。したがって、家族と社会福祉のかかわりを制度や政策のレベルで論じることが多かったのですが、実践的な領域を十分知らなければこうした研究は空疎なものになってしまいます。そのような意味で、研究所を拠点として研究上の新しい刺激が受けられることは、私にとってこの上ない喜びです。所員として、また専任教員としての成長の手がかりをここに求めたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

1990年度公開セミナーレポート

人とかかわる：
人間関係と対人コミュニケーション
～体験学習を通じて～ 第1回

「夏のセミナーに参加して」

所員 柴 崎 正 行

7月の7日(土)と8日(日)の2日間、恒例となった社会福祉研究所の夏季セミナーが、新しいテーマの第1回として開催された。私はこのセミナーは初めてということもあって少し不安を感じながら参加したが、今になって思い起こしてみると、自分の日々の生活の在り方そのものを問い直すいい機会になったように思う。

3つのグループにわかれて体験学習が進められ、私はCグループに参加したが、はじめのうち自分はメンバーの語った言葉をメモしながら聞いていた。授業や会議などに参加するときに、私はこれまでいつもそうした態度で参加している自分を問い直したとき、自分がいかに他の参加者と距離を置いているかということに気付いた。書くことに心を奪われ、目の前で語っている人の今の心に触れようとしていない自分はいったい何だろう。それは自分にとって、大きなショックでもあった。

メモすることをやめ、自分の気持ちを今というこの瞬間に出会っている参加者に集中したとき、Cグループに参加しているひとりひとりの人の存在が、重みをもって感じ取れるようになってきた。語られる言葉のひとつとひとつと、語るときの表情や動きなどが、自分の中に鮮明に入ってきた。このような態度で相手とかかわることがコミュニケーションをするということなのだ実感し、日頃の対人関係において自分がこのような態度で接しているかどうかを深く反省させられた。

このセミナーで体験したことは、今でも昨日のこのように思い起こされるし、またこれからも忘れることはないだろう。自分が本当に相手の人と深くかかわって生活しているのかどうか。私にとってはこのことを問い直すことができた、貴重な2日間であった。また次回の夏のセミナーで新たな出会いと発見を体験できたらと思う。

家族の生態学 第2回
—家族にとっての企業—

「企業の影と家族生活」

所員 小 滝 美智子

1990年11月10日(土)、秋季セミナー「家族の生態学」第2回が「家族にとっての企業」というテーマで開催された。参加者28名。

小幡由紀子氏は「企業の影の中の家族」という題で、家族への企業からの影響と企業戦士の実態を“父親の見えにくさ”“父親の家族滞在時間の短さ”“単身赴任”などを切り口に主婦の目から体験的に語った。その働き方が家族の中での父親の存在の稀薄さを生み、家族メンバーとの交流の機会を奪っており、そうならないために何より「働き手本人が自立的な生き方を」と結んだ。

石原正雄氏は「企業の人事担当として感じた家庭と仕事のはざま」と題し、20年間に遭遇した社内事例やご自身の体験を通して語った。さらに自分自身の問題として、妻から投げかけられた“家庭人”への問いに戸惑いながらも正面から受けとめ、家族、父と子、夫婦、男と女などさまざまな視点からのお話は印象的だった。

上田光枝氏は「産業カウンセリングの現状と方向について」と題して企業のカウンセリングの流れ、相談内容の推移を統計を示しながら話され、事例を通して企業内カウンセラーの立場、かわり等を紹介された。

三氏の講演を聞きながら、「家族にとっての企業」の意味は、父親であり夫である人の企業へのかかわり方によって異なるのではないかと感じた。企業戦士の夫たちに、支える妻からの「人」としての働きかけが在れば、石原氏のように仕事も家庭も生き生きと生きたいという実践が可能になり、その中で小幡氏の語る企業の影も薄められていくのではないかと。

企業の影が弱まる時、父親は家族や地域の中にその存在をもう少しはっきりと姿を見せてくれるのではないかと。ただ、それは企業がやってくれるのではなく、私たちが主体的に選んでいくもののように思う。

Mr. X and I in Liverpool Y.M.C.A

～ 英国研修印象記 ～

所 員 山 本 祐 策

私は、勤務校八代学院大学から英国に派遣され、1989 年 9 月から 1990 年 3 月までリヴァプール大学で研修してきました。その印象記を社会福祉ニュースに寄稿をと依頼されましたので、宿泊しておりましたリヴァプール Y.M.C.A. の 4 階、つまり我々の数え方では 5 階の隣室に先住していました「ミスター」X ～ 私は彼をいつもミスターと呼んでいました～ のことを記してみたいと思います。

6 畳ほどの私の部屋は、寝台と机とロッカーと洗面台という簡素きわまりないものでした。当初は、再発した腰痛が治まったら時間をかけて他を探す心づもりでしたが、大学の研究室、図書館に歩いて 5、6 分、朝食付夕食は選択、わけても腰痛にはハード・ボードが一番と地下室から古い木製ドアを運びあげ寝台を据えてくれましたフロントの気くばりの程に感じ、帰国するまでここに留まろうと決意したことでした。腰痛がひけ、他に良いところがみつかったというので引越すのは仁義に反するとも思えました。

その後、大学の同僚スタッフと、知りあいとなった留学生から、どうしてこんなところに長居しているのか、と尋ねられたこともありましたが、その都度、すこしく経緯を話し、これが港神戸・ジャパンのアウト・ローの精神（スピリット）である、と答えたものです。

さて、私の隣室に、以後いつも「ミスター」と呼ぶことになる屈強の壮年がおりましたことは先に記しました。彼はスコットランドの出身で、船員をしていた頃にニッポンに行ったことがある、ヨコハマ、コーベはすばらしいところだった、と話してくれました。プロフェッサー YAMAMOTO、と礼をつくして私を呼ぶ彼の声にも親しみが感じとられました。

数週間して、私は夜中にふと目を醒す、あるいは目ざめさせられると、ミスターの部屋から笑う声を耳にするようになりました。高笑いしているのです。知人と話しこんで、あるいはテレビに見入ってのことかと思っていましたが、度かさなので注意して聴くと、ミスターは独りのようです。私は、同じ 4 階のはずれの部屋の住人で熱帯医学研究所で研修中の留学生～ガザ地区出身で、私は彼をドクターと呼んでいました～に、このことを話してみました。ミスター

は何か神経を患っているのではないか、と思えたからです。

しかし、このドクターは、そういうことは口外しない方がよい、ミスターに知れたら、お前はナイフか何かで刺されるかもしれない、と忠告されました。既に、ミスターの左隣の学生二人は他の部屋に移っていました。私も心配になりました。クリスマス頃には妻と二人の娘が尋ねてきて、3 階の二部屋に逗留することになっていました。

夜中に 4 階の旧調理室の補強された窓ガラスが何者かに叩き割られる騒ぎも生じ、心配は増すばかりでした。しかし、私はミスターの隣室に留まろうと、決意しました。妻や娘たちには、これらのことを一切ふせておこう、万一の場合には私が家族の安全を守る覚悟をきめました。そして何よりもミスターの回復を、と祈りました。

12 月 24 日、サンタならぬ妻と娘たちがやってきました。ヒースロー空港に出迎え Y.M.C.A. に戻ったのは夕食時でした。食堂に入ると、ミスターが独りポツンと食卓に坐っていました。私は彼の傍に行き家族を紹介しました。ミスターは立ちあがって笑みを浮かべて、右手をお腹の上に軽く折りまげ鄭重に挨拶しました。ミスターは常々私に、父はスコットランドの Duke つまり公爵であるといっていたのですが、このときふと真実のように思われました。

3 日して、私たち家族はエジンバラ・ロンドンへ旅行することになりました。その日の朝、それぞれに荷物を持ちフロントに降りると、ミスターが入口近くにおりました。私どもを見ると近寄ってきて妻の荷物を持ち落差の大きい石段を降り歩道まで運んでくれました。妻はサンキューと云ってミスターと握手しました。ミスターは微笑み少し恥かしそうでした。

年明けて 3 日、帰国する家族をヒースロー空港に見送り、それから 3 月 29 日、研修を終えてリヴァプールを離れるまで、ミスターの夜中の高笑いはい止むことがありませんでした。

附記 後で知ったことですが、Y.M.C.A. には回復期の人とか独り暮らしの老人とかか引受けられ地域での機能を果しているということです。さすがレインの育った英国であると思いいたされます。

1990 年度社会福祉関係修士論文・卒業論文題目一覧

社会学研究科修士論文

- 臨床的視点からの対人コミュニケーション
— Tグループにおける関係変容のプロセス
を手がかりに — 岩本 操
- 『現代看護論
— 現状把握と人間関係学的方法論構築をと
おして』 岡崎 光洋

社会学部社会学科卒業論文

- 悲しみへの援助
— ある少年との関わりを通して 浅利麻衣子
- 母親になるということ
— 母親と乳児の相互関係を通して — 飯田 直子
- 『対人関係と時間』
— <生きられる時間>の「関係」・「意味」の
視点からの現象学的研究 — 小野 浩孝
- 青年期における自己像のゆらぎ
— 東京シュレーでの関わりを通じて — 神谷 里奈

- ケースワーク・プロセス及びスーパービジョ
ンにおける自己覚知
— 面接事例をめぐっての一考察 — 楠本 真名
- 世代間理解 高坂 淳也
- 母親になるということについて
— 役割の考察を通して — 澤田 明子
- 「自己受容」
— 思春期女子の摂食障害を通して — 庄野 良香
- 父子関係
— 父と子の実存的関係について — 左右田 哲
- 関係存在としての人間
— クワントの「人間と社会の現象学」
を通して — 田中かほり
- 誰にでもわかるクワント 新岡 由紀
- 「関係」における自己と身体 蓮井 陽子
- 他者理解のためのコミュニケーション
— 美容ラグビークラブにおけるコミュニケ
ーションを通して — 堀内 芳訓
- 集団としてのサークルの機能分析
— <F.C.キーガン>のばあい — 渡辺 健司

< 研究所スタッフ一覧 > (1991 年 3 月現在)

所 長	佐藤 悦子	立教大学社会学部教授
所 員	足立 叡	淑徳大学社会福祉学部教授
	池田 秀夫	美術評論家
	岩佐 壽夫	家庭ケースワーク研究所長
	江口 篤寿	(財)日本学校保健会常任理事
	岡田玲一郎	社会医療研究所長
	小川 憲治	立教大学社会学部助手
	小滝美智子	竹中工務店カウンセリン グルーム・カウンセラー
	梶原 達観	精神医学ソーシャルワー ク研究所長
	坂口 順治	立教大学文学部教授
	櫻井 芳郎	淑徳短期大学教授
	柴崎 正行	文部省初等中等教育局 幼稚園課 教育調査官
	庄司 洋子	立教大学社会学部教授
	高橋 良臣	登校拒否文化医学研究所 代表

所 員	田中 一彦	淑徳大学社会福祉学部教授
	田宮 崇	田宮病院長
	西澤 稔	特別養護老人ホーム 福音の家 施設長
	長谷川 浩	東京女子医科大学看護短 期大学教授
	早坂泰次郎	立教大学名誉教授 東京国際大学教授
	平木 典子	立教大学学生相談所 カウンセラー
	山本 祐策	八代学院大学教授
	山本 恵一	東京国際大学講師
研究員	田中ひな子	小田原女子短期大学 非常勤講師
	柳沢 孝主	聖母病院 総務課
研究所助手	河上 牧子	立教大学嘱託

立教大学社会福祉ニュース第15号 目次

• 持続と変容	1
• 藤本昇所員を悼む	2
藤本兄へ	
藤本さんのこと	3
藤本先生のこと ― 湯河原での三日間 ―	
• 所員・専任教員となって	4
• 1990年度公開セミナーレポート	5
• Mr. X and I in Liverpool Y.M.C.A. ～英国研修印象記～	6
• 1990年度社会福祉関係修士論文・卒業論文題目一覧	7
• 研究所スタッフ一覧	7
• お知らせ	8

＜お知らせ＞

1991年度公開セミナー開催

- (1) 「人とかかわる：人間関係と対人コミュニケーション」～体験学習を通して～第2回

日程：1991年7月13日(土)～14日(日)
(1泊2日)

会場：埼玉県勤労青少年 フレンドシップ・ハウス(埼玉県比企郡吉見町大字黒岩602)

※東武東上線にて池袋駅より55分、東松山駅下車、車で15分。

講師：佐藤悦子所長がコーディネーターを務めるほか、所員多数がスタッフとして参加。

費用：公費参加30,000円 私費参加26,000円
学生参加15,000円

定員：35名(定員になり次第、締め切らせていただきます。

※今回は、さらに皆様にご参加いただきやすいようにと、新しい会場・費用設定で、より充実したプログラムを準備しております。
ご期待下さい。

- (2) 「家族の生態学」 第3回

― 教育のなかの子どもと家族(仮題) ―

子どもをとりまく家族や学校など様々な教育現場からの発題講演と、それに引き続いての小グループでの参加学習―内容豊かな一日セミナーです。

日時：1991年11月9日(土) 9:30～16:30

会場：立教大学(予定)

※各セミナーの詳細につきましては、事務局までお問い合わせ下さい。パンフレットをお送り致します。但し、秋季セミナーのパンフレットは、9月下旬の送付となります。

＜編集後記＞

本年度は、「研究所移転」に象徴されるように「動」の一年だった。埃と汗まみれの移転作業の中、23年の当研究所の歴史の重み、先達の真摯な思いと貴重な業績、そのスピリットを継承してゆく者としての責任を痛感した。

この新しい活動の拠点を藤本先生はご覧にならずに、逝かれた。本ニュースが先生の追悼号となっている事が今もって信じられない。先生が福祉研に、また一人一人に豊かに蒔いてゆかれた種を新しい活動の中で実らせてゆきたい。亡き先生に感謝しつつ、この号を哀悼をこめて捧げさせていただきます。(河上)

立教大学社会福祉ニュース 第15号

1991年3月20日印刷

1991年3月25日発行

編集兼発行者 佐藤悦子
発行所 立教大学社会福祉研究所
東京都豊島区西池袋3丁目
電話 03(3985)2663